

## おわりに

このたびは、京都大学藤子不二雄同好会(京大F同)の企画に足を運んでいただき、またこの会誌を手にとっていただきありがとうございます。

私は京大F同に入会して今年度で5年目となります。ちょうどよい機会なので、個人的に思うことを、この場を借りて書き留めておこうと思います。それは、京大F同という場についてです。

京大F同は大学の非公認団体であり、学内に部室を持っているわけではありません。2009年の発足から来年度2024年で15周年を迎えますが、その歴史の中で受け継がれてきたドラえもののぬいぐるみや、『未来の想い出』の納戸理人フィギュア、ドンジャラなどの藤子不二雄グッズを含む備品は、会員がそれぞれ実家や下宿に保管し、卒業時に下の代に受け継いでいます。ここ数年は新入会員の獲得に苦心し、これらの備品の負担も少人数に集中するなど、状況はますます厳しくなりつつあります。かくいう私も、下宿にドラえもののぬいぐるみを2体と、大学の研究室にドンジャラを保管しています。対面での活動についても、非公認団体が利用できる学内のスペースは大きく制限されており、F同の対面活動の重要な柱である上映会の会場を確保するのも一苦労でした。このような状況について、あえて危機的な言い方をすれば、F同は存続の岐路に立たされています。

潮目が変わったのは、私が学部2回生のときに始まった、コロナ禍です。大学は直ちにオンライン授業に切り替わり、学生たちは自粛生活を余儀なくされました。このとき特に、部室という活動の物理的実体を持たない非公認サークルは苦境に置かれ、やがて多くのサークルが自然消滅しました。その中で、京大F同がこの日まで存続できたことは、私たちが考えているよりずっと驚くべきことかもしれません。

京大F同はコロナ禍初期にZoom上でのオンライン例会を中心とした活動形態に移行しました。その後、Discordサーバーの立ち上げを経て、対面での活動が戻りつつある現在も会員の交流の場として用いられています。

私は、特にコロナ禍において一年以上F同の活動からは距離を置いていました。それは、自身の生活の対処で精いっぱい、F同の活動に時間を割くだけの精神的な体力を失っていたことが大きいのですが、それはさておき。ちょうど一昨年、2021年のNFの準備期間に入ったタイミングで、私は京大F同の活動に復帰しました。久々に顔を出した私を、会員の皆さんがすんなりと受け入れてくれたことを、感謝しています。

その後、復帰してすぐに次期会長に祭り上げられました。会長としての一年間は、早稲田大学ドラえもん研究会とのコラボ企画やNFの会誌、クイズ制作で本格的に指揮を執るなど、充実したものだったと思います。そして、幽霊部員だった私が復帰後すぐに会長になった、という時点で、京大F同の置かれている状況については察していただけるかと思います。

現在も週一回の頻度で行われるオンライン上での例会は、必ずしも藤子不二雄先生の話で占められているわけではなく、むしろ他愛のない雑談がほとんどです。日々の大学生活に関することから、藤子不二雄とは関係ない会員の趣味の話や社会問題に関する議論、果ては将来の身の振り方に関わる話まで、私たちは会員の誰かのささいな呟きから始まって、様々な話題を取り扱っています(もちろん、ドラえもんの話で数時間話し続けることもあります)。

22時ごろから始まる例会は、翌午前3時まで続くことも珍しくありません。日付が変わるころに眠くなって途中退室する会員もいれば、それと入れ違いに途中参加する会員もいます。毎週のことながら、よく話題が尽きないものだと感じますが、そうしたある種の自由さは、京都大学の風土にも合っているように感じます。

振り返ってみると、行き当たりばったりで緩やかに持続してきたF同の活動ですが、重要なことは、京大F同が、常に誰かの居場所になってきた、ということです。当時、他者との関わりを忘れて、自己の世界に閉じこ

もっていた私にとって、週に一度の例会が、布団の中から参加するとりとめのないやりとりが、日々のささやかな救いとなっていたことは確かです。

画面越しに言葉を交わしている相手が、自分と同じく藤子不二雄作品への愛を抱えてこのサークルに集まったという事実に対する安心感は、私たちのコミュニケーションに対する心理的障害を低減しているように思います。藤子不二雄を愛する人間が集まっていることが、逆説的に藤子不二雄に限定されない、さまざまな話題ができることに繋がっているのは、とても興味深いことです。

私たちは、それぞれが自分なりの生きづらさを抱えています。弱く、ひとりでは生きていくことができません。

会員が日々の大学生活に関する雑談や、時には相談の場として京大F同を利用できることは、京大F同という場が、大学という場であぶれてしまった私たちを、社会の一員としてつなぎとめる役割を担っていることを意味します。私はこの部分に、京大F同の大きな価値を見出しています。

そして今年も、そうやって繋ぎ止められた会員たちによって、素晴らしい会誌とクイズが完成し、NFでの企画が実施にこぎつけられたものと思います。「おわりに」として、適切な言葉を残すことができたか自信ありませんが、願わくば、京都大学藤子不二雄同好会という場所が、末永く誰かの居場所であり続けてほしいものです。

前会長 京都大学理学研究科 1 回生 前田悠陽